九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

等位接続とニ使役文

壱岐, 勝
九州大学大学院

https://doi.org/10.15017/16405

出版情報：九州大学言語学論集. 30, pp.59-74, 2009-12. Department of Linguistics, Faculty of Humanities, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

『九州大学言語学論集』第30号(2009.12),59-74

等位接続とニ使役文

壱岐　勝
（九州大学大学院）
ikimasa@lit.kyushu-u.ac.jp

キーワード：等位接続、ニ使役文、PF affixation

1. はじめに：ニ使役文同士の等位接続

日本語の使役文は、述語動詞語幹に使役接辞 sase が付加した文を指すが、被使役者（Causee）に付加する格助詞によって「ニ」使役文,「ヲ」使役文と呼ばれている[1]。

(1)　a.　太郎が　次郎**に**　病院へ　行かせた　　（ニ使役文）
　　b.　太郎が　次郎**を**　病院へ　行かせた　　（ヲ使役文）

本論文では(2)のような、二項動詞に sase が付加したニ使役文について考察する。

(2)　　太郎が　次郎**に**　ご飯を　食べ　-させた[2]
　　Causer　Causee　Caused Event
　　cf.　次郎が　ご飯を　食べた

(2)のタイプのニ使役文を並列する際、ニ使役文全体を等位接続した(3)のような文のほか、(4),(5)のような等位接続も可能である[3]。

(3)　ニ使役文全体を等位接続した文
　　<u>太郎が次郎に食器を洗わせ</u>, <u>花子が順子にテーブルを拭かせ</u>た

---

[1] ニ使役文・ヲ使役文の派生過程について論じた初期の研究に、Kuroda (1965), Shibatani (1973), Harada (1973)などがある。
[2] 本論では使役接辞 sase を、(Causer, Causee, Caused Event)を項として取る３項述語であると仮定する。なお、使役接辞 sase が３項述語であることは、壱岐(2009)で論じている。
[3] 例文中の下線部分は、等位接続している要素を示している。

(4)　動詞語幹-sase と項１つを等位接続した文

a.　太郎が次郎に食器を洗わせ，テーブルを拭かせた

b.　太郎が次郎に食器を洗わせ，順子に拭かせた

c.　太郎が次郎に食器を洗わせ，花子が拭かせた

(5)　動詞語幹-sase と項２つを等位接続した文

a.　太郎が次郎に食器を洗わせ，順子にテーブルを拭かせた

b.　太郎が次郎に食器を洗わせ，花子が順子に拭かせた

c.　太郎が次郎に食器を洗わせ，花子がテーブルを拭かせた

これら等位接続文において、final conjunct（末尾の等位節）の動詞語幹にのみ sase が存在するようにしてみる。すると、(4a)に対応する文のみが容認可能となり、それ以外の等位接続文はいずれも容認不可能な文となる[4]。

(6)　太郎が次郎に食器を洗い，テーブルを拭かせた　[cf. (4a)]

(7)　a.　*太郎が次郎に食器を洗い，順子に拭かせた　[cf. (4b)]

b.　*太郎が次郎に食器を洗い，花子が拭かせた　[cf. (4c)]

c.　*太郎が次郎に食器を洗い，順子にテーブルを拭かせた　[cf. (5a)]

d.　*太郎が次郎に食器を洗い，花子が順子に拭かせた　[cf. (5b)]

e.　*太郎が次郎に食器を洗い，花子がテーブルを拭かせた　[cf. (5c)]

f.　*太郎が次郎に食器を洗い，花子が順子にテーブルを拭かせた　[cf. (3)]

なぜこのような差異が生じるのであろうか。容認可能な(6)を見ると、sase１つに対して Causer 項, Causee 項が、等位接続文全体でそれぞれ１つだけ存在する。一方、容認不可能な(7)では、等位接続文全体で sase１つに対して Causer 項, Causee 項がいずれも複数存在している[5]。以上をまとめると、(8)のようになる。

(8)　ニ使役文の等位接続に関する一般化[6]：

sase が final conjunct にのみ現れている場合、Causer に対するガ格、及び Causee に対するニ格は、等位接続全体で１つしか生起できない。

---

[4] (6)の文が容認しづらい場合は、まず以下の例で容認性判断を試して欲しい。

(i)　a.　太郎が次郎にコンピュータで線を引き，表を作らせた

b.　太郎が次郎に先生に電話をかけ，事の次第を伝えさせた

c.　太郎が次郎にドアを閉め，カギをかけさせた

[5] (6),(7)において、Causer 項, Causee 項に相当する名詞句を網掛けで示している。

[6] 本論では等位接続の例として conjunct が２つのものだけを挙げていが、本論での一般化および提案は conjunct が複数ある等位接続文でも同様に当てはまると考えている。

本論文では、この(8)の一般化が説明できる分析を提案する。まず次節で、日本語の等位接続辞を使った文を概観し、それに沿う形で日本語の等位接続辞に関する提案を行う。続く３節でニ使役文の構造に関する提案を行い、これら２つの提案に基づけば(8)の一般化が説明できることを４節で示す。最後に５節で、使役文に関する従来の分析では(8)の一般化が説明できないことを指摘し、本論文の提案が(8)を説明できる点で利点があることを示す。

2. 提案１：等位接続

本節では、日本語の等位接続文の構造に関する提案を行うが、その前にまず一般的な等位接続文の特徴を概観し、その観点から日本語の等位接続文の統語的特徴を明確にしていく。一般的な等位接続文の特徴を探るために、英語の等位接続文を例に見ていく。

英語の等位接続では and, but などの等位接続詞が使われ、語や句や節と様々な単位で等位接続を行う。そして以下の特徴を持つことが知られている。

(9) 等位接続一般の特徴 （cf. Radford 1981）

語順：[$_{\gamma}$ α 等位接続詞 β]

a. αには、さまざまな範疇が、どの投射レベルでも生起できる[7]。

---

[7] 英語でも、様々な範疇の要素が、語レベルのものから phrase レベルのものまで等位接続可能である。

(i) 名詞(句)同士の等位接続

a. Good <u>linguists</u> and <u>philosophers</u> are rare. [Radford 1981: 60(79a)]

b. <u>The man next door</u> and <u>his wife</u> are nice. [Radford 1981: 60(80a)]

(ii) 形容詞(句)同士の等位接続

a. John is a very <u>kind</u> and <u>considerate</u> person. [Radford 1981: 60(79b)]

b. He is a <u>very shy</u> and <u>rather inarticulate</u> person. [Radford 1981: 60(80b)]

(iii) 前置詞(句)同士の等位接続

a. There are arguments <u>for</u> and <u>against</u> this claim. [Radford 1981: 60(79c)]

b. He went <u>to London</u> and <u>to Paris</u>. [Radford 1981: 60(80c)]

(iv) 動詞(句)同士の等位接続

a. J.R. <u>walks</u> and <u>talks</u> like a true Taxan. [Radford 1981: 60(79d)]

b. He may <u>go to London</u> and <u>visit his mother</u>. [Radford 1981: 60(80d)]

(v) 副詞(句)同士の等位接続

a. He opened the door quite <u>slowly</u> and <u>deliberately</u>. [Radford 1981: 60(79f)]

b. John drives <u>very slowly</u> and <u>very carefully</u>. [Radford 1981: 60(80e)]

(vi) 冠詞同士の等位接続

You can bring <u>these</u> and <u>those</u> books. [Radford 1981: 60(79e)]

b. ただし、連結する α，β は同じ範疇でかつ構成素を成していなければならない[8]。

c. α と β を連結した結果できる γ も、α，β と同じ範疇となる[9]。

一方、日本語の等位接続は、個々の接続辞によって conjunct に対する付加の仕方、ならびに conjunct に対する選択制限があるが、概ね英語などの言語で見られる(9)の特徴を持つと思われる。等位接続辞「-なり」を例に見てみよう。「-なり」は体言(句)同士と述語(句)を連結することが可能な接辞で、各 conjunct の末尾に付加するものある。

(10) a. 突然の来客で 太郎が [お茶]**なり**[お菓子]**なり**を 準備した

b. 突然の来客で [太郎が床を拭く]**なり**[次郎が花を飾る]**なり** 準備した

この接続辞「-なり」が述語同士を連結する場合、(11)で見られるように、α,β が動詞語幹同士ばかりでなく述語句や文全体を連結することも可能であり、また連結した結果できる γ も述語(句)ならびに文の特性を持つ。

(11) a. 太郎が車を [$_{\gamma}$ [$_{\alpha}$洗う]**なり**, [$_{\beta}$拭く]**なり**] した

b. 太郎が [$_{\gamma}$ [$_{\alpha}$食器を洗う]**なり**, [$_{\beta}$テーブルを拭く]**なり**] した

c. [$_{\gamma}$ [$_{\alpha}$太郎が食器を洗う]**なり**, [$_{\beta}$花子がテーブルを拭く]**なり**] した

---

[8] 等位接続は、各 conjunct が構成素をなしていなければならない。

(i) Only constituents can be conjoined; non-constituent sequences cannot be conjoined. [Radford 1981: 59(76)]

例えば英語の例(ii)において、下線部同士を and で等位接続できないが、これは up his mother ならびに up his sister がそれぞれ構成素を成していないためである。

(ii) *John rang <u>up</u> <u>his mother</u> and <u>up</u> <u>his sister</u>. [Radford 1981: 59(75)]

ところが英語には、構成素を成しているもの同士を等位接続しているにも関わらず、容認しづらい例がある。

(iii) a. ?John wrote <u>a letter</u> and <u>to Fred</u>. (= NP and PP) [Radford 1981: 59(77c)]

b. ?John wrote <u>to Fred</u> and <u>a letter</u>. (= PP and NP) [Radford 1981: 59(77d)]

cf. John wrote <u>a letter</u> and <u>a postcard</u>. (= NP and NP) [Radford 1981: 59(77a)]

cf. John wrote <u>to Mary</u> and <u>to Fred</u>. (= PP and PP) [Radford 1981: 59(77b)]

これに関しては、(ii)の条件に加えて、以下の条件が仮定されている。

(v) Only identical categories can be conjoined, idiomatically. [Radford 1981: 60(78)]

[9] (9b)に関しては、以下の記述も参照されたい。

(i) In general, it seems that coordinated constituents have the same category status as their conjuncts... [Radford 1981: 105]

ところが連結する conjunct の範疇が異なると容認できない。

(12)　　*突然の来客で [お茶]**なり** [次郎が床を拭く]**なり** 準備した

このように、日本語の等位接続文も、英語などの言語で見られる(9)の特徴を持つと考えられる。日本語の等位接続の特徴を整理すると、(13)のようになる。

(13) 日本語の等位接続：　[$_{\gamma}$ α-接続辞[10]　β(-接続辞)]
　a.　αがどの投射レベルでも、等位接続が可能である　（cf. (9a)）
　b.　ただし、連結するα, βは、同じ範疇でなければならない[11]　（cf. (9b)）
　c.　αとβを連結してできた構築物γも、α, βと同じ範疇である（cf. (9c)）

そこで、日本語の構造が Head-final であることも考慮して、日本語の等位接続に関して以下のような仮定をしておきたい。

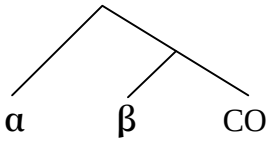
---

[10] 日本語の等位接続辞は、個々の接続辞によって(a) conjunct に対する付加の仕方、ならびに (b) conjunct に対する選択制限が異なる。この点について、ここで整理しておく。
まず(a)に関して、日本語の等位接続辞は (i) conjunct 間に生起するものと、(ii) conjunct ごとに生起するものの 2 タイプある。
(i)　conjunct 間にのみ生起するもの
　a.　父が 子供と 遊んでくれ**て**, 母が 家の掃除を 手伝ってくれた
　b.　父が 書類を 書き **かつ** 息子が 郵送を 行った
(ii)　各 conjunct ごとに生起するもの
　a.　太郎が 花子を 叩い**たり** 次郎が 順子を 叱っ**たり** した
　b.　台風のせいで 植木鉢が 倒れる**は**, 屋根瓦が 割れる**は** した
次に(b)に関して、日本語の等位接続辞は、接辞によって付加する範疇に制限がある。この点、様々な範疇が等位接続可能な英語などの言語とは異なる。
(iii)　体言句にのみ付加する等位接続辞
　a.　[太郎**や**花子]が 講演会に来た
　b.　*[太郎が洗濯物を干す]**や**, [花子が上着をハンガーにかけた]
(iv)　述語句にのみ付加する等位接続辞
　a.　*[太郎**て**花子]が 講演会に来た
　b.　[太郎が洗濯物を干し]**て**, [花子が上着をハンガーにかけ]た
(v)　体言句・述語句両方に付加する等位接続辞
　a.　[太郎**なり**花子**なり**]が 講演会に来た
　b.　[太郎が 夕食を 食べる]**なり** [次郎が 酒を 飲む]**なり** した

[11] 日本語においてα, βが構成素かどうかは、下例を含めさらなる議論が必要であろう。
(i)　母親が [花子にリンゴを３つ]**と** [久美子にバナナを２本] 買ってくるように (丁寧に) 頼んだ　[Fukui and Sakai 2003: 346(27a)]

(14) 日本語の等位接続辞 CO(ordinator)[12]

CO 句



(i) Spell-Out まで：CO の conjunct との merge

a. 等位接続辞 CO は、それ自体、範疇素性が未指定(unspecified)なので、最初に merge する句の範疇素性を継承(inherit)する。

b. CO は継承した範疇素性と同じ範疇のものとしか merge できない。

(ii) Spell-Out 以降：CO の接辞付加（PF-affixation）

CO は、PF において、それが merge した句の主要部に接辞付加（PF affixation）することがある[13]。

また個々の日本語の等位接続辞は、conjunct への付加の仕方、ならびに conjunct に対する選択制限を持つ。共に述語を選択する以下の等位接続辞でも、conjunct 間に生起するものと、各 conjunct 末に生起するものとが存在する。

(15) a. [$_{\gamma}$ [$_{\alpha}$太郎が食器を洗い], [$_{\beta}$花子がテーブルを拭い]]た

b. [$_{\gamma}$ [$_{\alpha}$太郎が食器を洗っ]**て**, [$_{\beta}$花子がテーブルを拭い]]た

c. [$_{\gamma}$ [$_{\alpha}$太郎が食器を洗っ]**たり**, [$_{\beta}$花子がテーブルを拭い]**たり**] した

これについて本論は、等位接続辞には各々語彙的な指定があると考えたい。

---

[12] 本論では等位接続辞を、体言(句)を連結するものだけでなく、述語を連結するいわゆる並列助詞も含めたものであると考える。これは並列助詞が(13)の特徴を示すことによる。日本語の並列表現については、渡辺(1971), 久野(1973), Martin(1988), 寺村(1991)等を、また等位節と並列節の違いについては、寺村(1984), 森山(1995)を参照してほしい。

なお等位接続辞には、以下のように文頭に置いて前文との論理関係を示す接続語として機能するものもあるが、本論ではこのような場合の接続辞を考察の対象としない。

(i) 太郎が食器を洗った。**しかも** 次郎が机を拭いた

cf. 太郎が食器を洗い **しかも** 次郎が机を拭いた

[13] 注 10 では以下のような、述語(句)同士ならびに体言(句)同士の並列も許す等位接続辞を見た。このタイプの接続辞において、体言(句)同士の並列(i)においても PF affixation を仮定するべきかは、ここではおいておく。

(i) 太郎が チャーハン**やら** ラーメン**やら**を 食べた

cf. 太郎が 夕食を 食べる**やら** 次郎が 酒を 飲む**やら** 忙しかった

(16) (15)の等位接続辞の語彙指定[14]

a. /-i/ 動詞もしくは動詞句と merge する。
最初に merge した要素に対して PF affixation が起こらない。

b. /-te/ 動詞もしくは動詞句と merge する。
最初に merge した要素に対して PF affixation が起こらない。

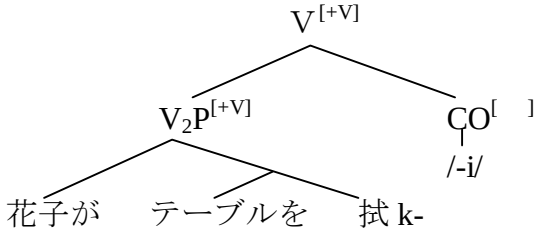
c. /-tari/ 動詞もしくは動詞句と merge する。
merge した要素すべてに対して PF affixation が起こる[15]。

(14),(16)の提案に基づき、以下で(11a)の等位接続文の具体的な生成手順を示す。

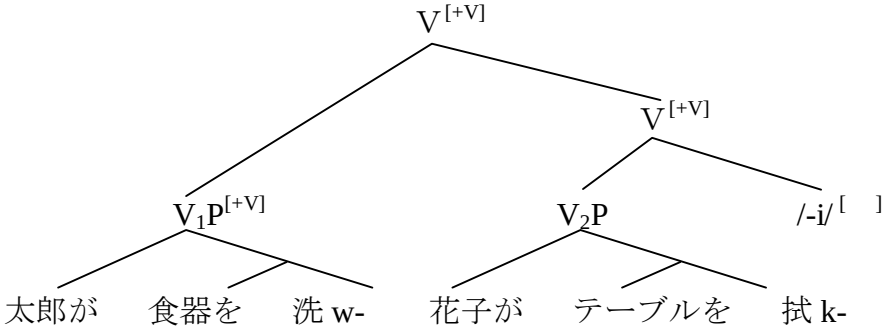
(11) a. 太郎が食器を洗い, 花子がテーブルを拭いた

(17) (i) Spell-Out まで

a. CO と 1 つ目の conjunct との merge [(14-i-a)]



b. CO と 2 つ目の conjunct との merge [(14-i-b)]



---

[14] (16)の接続辞が PF で動詞語幹に接辞付加する時、以下のような音韻規則を受ける。

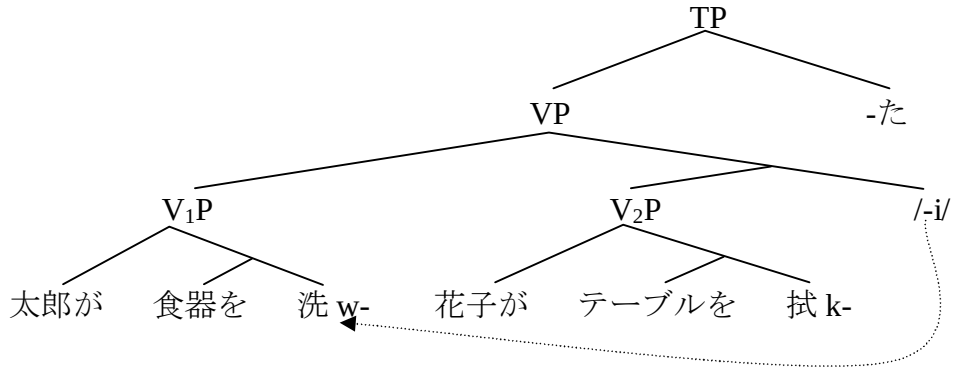
(i) a. /-i/ i → φ/ 母音語幹__

b. /-te/ V-{i /φ}-te の具現形は、一般のテ形の形態音韻規則に従う。

c. /-tari/ V-{i /φ}-tari の具現形は、テ形の形態音韻規則に準ずる。

[15] 時制辞-ta は通常、動詞語幹に付加するが、動詞語幹に対してすでに別の要素が PF 接辞付加(affixation)をしている場合、-ta は動詞語幹に直接 PF affixation できず、代わりに su-が挿入されてそれに接辞付加する。

(ii)　Spell-Out 以降（CO の PF-affixation[16]）　[(14-ii)]



3. 提案２：使役文の構造

前節では、日本語の等位接続について、等位接続文一般で見られる特徴ならびに日本語特有の特性を考慮した上で、日本語の等位接続に関する提案を行った。その上で、本節ではニ使役文の構造に関し、次のような提案を行う。

(18)　ニ使役文の統語的特性

a.　動詞語幹と sase は、それぞれ独立した投射の主要部（Head）となる要素である。

b.　Causer へのガ格付与、ならびに Causee へのニ格付与は、１つの sase につき１回だけ行われる[17]。

c.　sase は Spell-Out 以降で隣接する動詞語幹に接辞付加（affixation）する[18]。

また注１でも述べたように、本論では使役接辞 sase を(Causer (Causee (Event)))を項として取る３項述語であると考える。このことと(18)の提案に基づくと、例えば(19)のようなニ使役文は(20)のような構造になる。

---

[16] 以下、樹形図内の破線矢印は、PF での接辞付加の方向を表す。

[17] ニ使役文では、ニ格名詞句が２つ生起することがある。この時、最初のニ格（「次郎に」）は adjunct であると考えたい。なお(i)のタイプのニ使役文は考察対象としない。

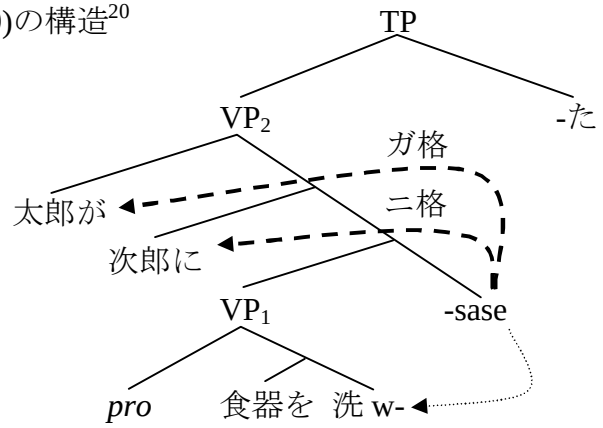
(i)　　太郎が　次郎**に**　息子**に**　食器を洗わせた

[18] sase が PF で動詞語幹に接辞付加する時、以下の音韻規則を受ける。

(i)　/-sase/　　s → φ/ 子音動詞語幹] [__ase

(19)　　太郎が　次郎に　食器を　洗わせた[19]
　　Causer　Causee　Caused Event

(20)　(19)の構造[20]



4. 分析

使役文の構造を(20)のように仮定すると、(8)の一般化が説明できる。

(8)　ニ使役文の等位接続に関する一般化：
sase が final conjunct にのみ現れている場合、Causer に対するガ格、及び Causee に対するニ格は、等位接続全体で１つしか生起できない。

まず、容認不可能な(7)の例から見ていく。

(7)　a.　*太郎が次郎に食器を洗い，順子に拭かせた　[cf. (4b)]
　　b.　*太郎が次郎に食器を洗い，花子が拭かせた　[cf. (4c)]
　　c.　*太郎が次郎に食器を洗い，順子にテーブルを拭かせた　[cf. (5a)]
　　d.　*太郎が次郎に食器を洗い，花子が順子に拭かせた　[cf. (5b)]
　　e.　*太郎が次郎に食器を洗い，花子がテーブルを拭かせた　[cf. (5c)]
　　f.　*太郎が次郎に食器を洗い，花子が順子にテーブルを拭かせた　[cf. (3)]

---

[19] 本論では sase の Caused Event 項の動作主に pro が生起していると仮定する。これは Causee と Caused Event 項の動作主とが別人と解釈することが可能であるからである。
(i)　　国王が　指揮官に　pro　敵兵を　捜させた
しかし、Caused Event を行う人間は、音形を持って現れることができない。
(ii)　　*国王が　指揮官に　兵士**が**　敵兵を　捜させた
これは、おそらく格の点から説明するべきことだと考えているが、ここではおいておく。

[20] 以下、樹形図内の太字の破線矢印は、ガ格付与およびニ格付与の方向を表す。

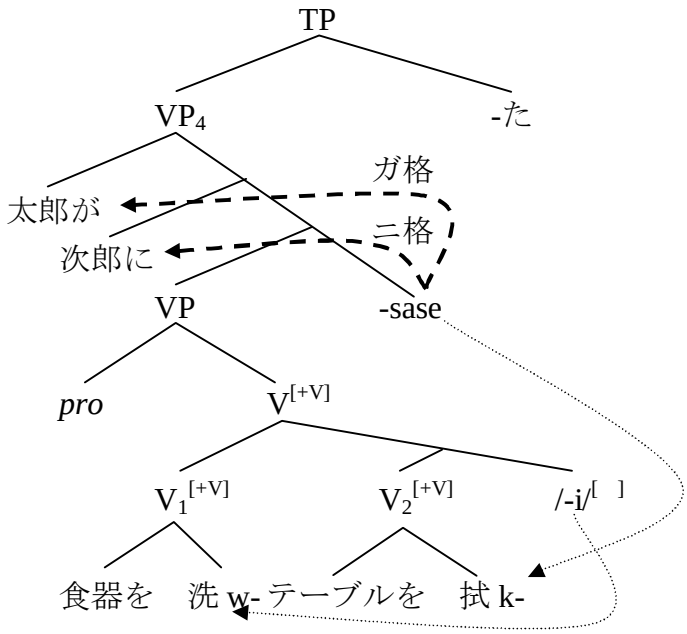
(7)はいずれも、sase が文全体で１つしかないにもかかわらず、Causer に対するガ格ないしは Causee に対するニ格が等位接続文全体で２つ存在している。(18b)の提案が正しいとすると、このような文は決して派生されないことになる。

(18) b. Causer へのガ格付与、ならびに Causee へのニ格付与は、１つの sase につき１回だけ行われる。

他方、(6)が容認可能であるのは、sase が１つあるが、Causer に対するガ格および Causee に対するニ格が等位接続文全体で１つずつ存在しているからである。

(6) 太郎が次郎に食器を洗い, テーブルを拭かせた

(21)



以上、本論で行った提案(18b)に基づき、(8)の一般化が適切に説明できることを示した。最後に(18a,c)の提案について、それぞれ触れておく。

(18) a. 動詞語幹と sase は、それぞれ独立した投射の主要部（Head）となる要素である。

(18a)に関しては、まず(6)の文に着目してほしい。(6)は first conjunct の「洗 w-」に sase が直接付加していないが、「洗わせる」という解釈が可能である。

(6) 太郎が 次郎に 食器を洗い テーブルを拭か せた

Causer Causee Caused Event

さらに、動詞語幹と sase の間には、等位接続辞やとりたて助詞が介在できる。

(22)　　太郎が 次郎に 食器を 洗っ**たり**（**も**）させた

こうした解釈と形式を生むためには、sase 単独で computational System 内の Head を成すと考える方が妥当であると思われる。
　次に(18c)に関して、述べておく。

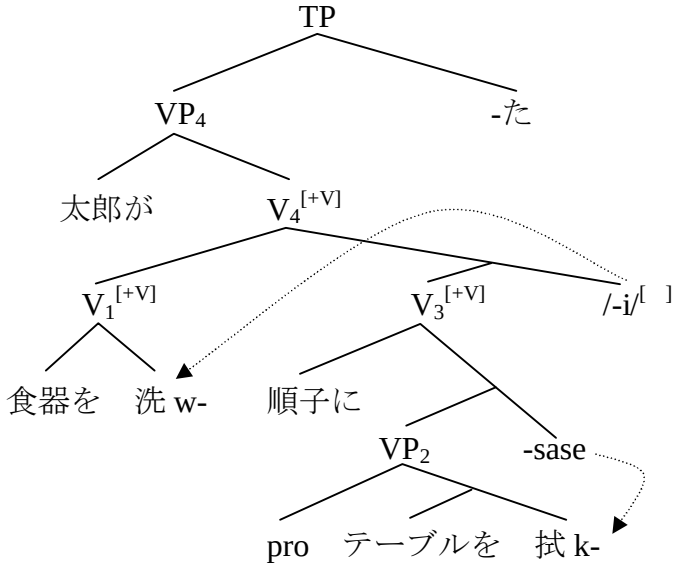
(18)　c.　sase は Spell-Out 以降で隣接する動詞語幹に接辞付加（affixation）する。

まず下の(23)の例に注目して欲しい。(23)は、(6)と同様、final conjunct にのみ sase が現れている文である。しかし first conjunct の「洗 w-」に使役の解釈の生じない点で違いがある。

(23)　　太郎が食器を洗い, 順子にテーブルを拭かせた
(6)　　太郎が次郎に食器を洗い, テーブルを拭かせた

両者の解釈の違いをふまえて(23)の構造を示すと、(24)になる。すなわち、(6)に対応する構造(21)では sase が CO を c-command しているが、(23)に対応する構造(24)では sase が CO に c-command されている形になっている。

(24)



しかし両者とも、sase は final conjunct にのみ現れている。このような構造・解釈面での違いがあるにもかかわらず、結果として生じる音連鎖が似たものにな

るのは、まさに点線で示されている PF-affixation 規則のためなのである。

5. 考察

以上が本論の提案であるが、この提案は(25)を仮定する使役文の分析に対する反論でもある。

(25) 否定したい分析１　　[cf. 宮川 1989]
動詞語幹と sase は、numeration の段階で１つの動詞となっている。
（＝動詞語幹と sase の argument structure や格に関する素性は、numeration の段階ですでに融合されている）

(25)の分析は、動詞に sase が具現していなければ、使役接辞が要求する項が出てこないことを予測するものである。この分析を採ると、容認可能な(6)が派生できなくなってしまう。なぜなら、first conjunct の動詞語幹に sase が付加していないために、Causee の「次郎に」が生起できないことになるからである。

(6)　太郎が次郎に食器を洗い, テーブルを拭かせた

また本論の提案は、(26)のように、使役素性を仮定して、PF でその素性を持つ動詞に sase が具現するという分析に対する反論でもある。

(26) 否定したい分析２　　[cf. Halle and Marantz 1993]
a. 動詞語幹は使役の素性 [+causative] を持つことがある。
（＝ [+causative] の動詞語幹は argument structure や格に関する素性が使役文に合った形になる）
b. [+causative] の動詞は（原則的に）V-sase の形で具現する。
ただし、[+causative] の動詞 V_1, V_2 が等位接続された場合には、V_1,V_2 の両方とも V-sase の形で具現しても、最後のものだけが V-sase の形になってもよい。

(26)の分析は、動詞に sase が具現していなくても、その動詞が使役素性さえ持っていれば、使役文に必須の要素（Causer, Causee, Caused Event）が生起可能であると予測するものである。この分析を採ると、先ほどの(6)は生成可能にはなるが、今度は容認できない(7)まで生成可能になってしまう。

(7) c. *太郎が次郎に食器を洗い,　　順子にテーブルを拭かせた
f. *太郎が次郎に食器を洗い, 花子が順子にテーブルを拭かせた

ここまでの議論で示してきたように、使役接辞 sase は音形を持った１つの独立した項目として扱われなければならない。また、sase に関わる様々な分布、すなわち構造上の違いがあるにもかかわらず同じ音連鎖が生じることを説明するためには、PF-affixation を仮定する必要があるのである。

6. まとめ

本論では、等位接続の観点から、日本語のニ使役文の構造についての分析案を提示した。まず日本語の等位接続文に関する特徴に沿った形で日本語の等位接続辞に関する提案をした。その上でニ使役文の構造に関する提案を行うと、(8)の一般化が説明できることを示した。本稿で提示した等位接続の観点から、ヲ使役文、受身文などの複合述語文へと観察を広げると、それらの構造上の違いも明らかにできる可能性がある[21]。この点に関しては稿を改めて行いたい[22]。

---

[21] ニ使役文以外の複合述語文における等位接続は、壱岐(2008)で少し触れている。

[22] 本論で考察対象ではなかったタイプのニ使役文について、ここで触れておく。まず一項動詞に sase が付加したニ使役文は、以下の２つが可能である。
(i) a. 太郎が 息子**に** 駅まで 走らせた
b. 太郎が 花子**に** 息子を 駅まで 走らせた
ところが、(ia,b)のタイプのニ使役文を様々な範囲で並列しても、final conjunct にしか sase がない場合はいずれも容認不可能となる。
(ii) 太郎が息子に公園に行かせ, 次郎が娘にプールで遊ばせた
a. *太郎が息子に公園に行き, 次郎が娘にプールで遊ばせた
b. *太郎が息子に公園に行き,　　娘にプールで遊ばせた
c. *太郎が息子に公園に行き,　　プールで遊ばせた
(iii) 太郎が花子に息子を公園に行かせ, 次郎が幸子に娘をプールで遊ばせた
a. *太郎が花子に息子を公園に行き, 次郎が幸子に娘をプールで遊ばせた
b. *太郎が花子に息子を公園に行き,　　幸子に娘をプールで遊ばせた
c. *太郎が花子に息子を公園に行き,　　娘をプールで遊ばせた
d. *太郎が花子に息子を公園に行き,　　プールで遊ばせた
また注 17 でも触れたが、二項動詞に sase が付加したニ使役文には以下のものもある。
(iv) 太郎が 次郎**に** 息子**に** 食器を 洗わせた
ところが、このタイプのニ使役文を様々な範囲で並列しても、final conjunct にしか sase がない場合はいずれも容認不可能となる。
(v) 太郎が次郎に息子に食器を洗わせ, 次郎が幸子に娘にテーブルを拭かせた
a. *太郎が次郎に息子に食器を洗い, 次郎が幸子に娘にテーブルを拭かせた
b. *太郎が次郎に息子に食器を洗い,　　幸子に娘にテーブルを拭かせた

謝辞

本稿は、日本言語学会第 136 回大会での発表（題目：等位接続と使役文）の一部をまとめたものである。大会発表までの過程でご指導をいただいた、九州大学の稲田俊明先生、坂本勉先生、久保智之先生、上山あゆみ先生、高井岩生氏に、心から感謝申し上げる。また本稿執筆に際し、匿名査読者の方から、論旨の不明瞭な点をはじめ、貴重なコメントやご助言を数多くいただいた。記して感謝申し上げる。なお、本稿の不備や誤りは、すべて筆者の責任である。

参考文献

Fukui, Naoki and Hiromu Sakai (2003) The visibility guideline for functional categories: verb raising in Japanese and related issues. *Lingua* 113: 321-375.

Halle, Morris and Alec Marantz (1993) Distributed morphology and the pieces of inflection. In: Kenneth Hale and Samuel Jay Keyser（eds.）*The view from Building 20*, 111-176. Cambridge MA.: MIT Press.

Harada, S.-I. (1973) Counter equi NP deletion. *Annual Bulletin, Research Institute of Logopedics and Phoniatrics, University of Tokyo* 7: 113-147.

壱岐勝 (2008)「等位接続と使役文」『日本言語学会第 136 回大会予稿集』: 170-175.

壱岐勝 (2009)「ニ使役文の構造と等位接続文」『電子情報通信学会技術研究報告 TL 思考と言語』109-140: 5-10.

久野暲 (1973)『日本文法研究』東京: 大修館書店.

Kuroda, S.-Y. (1965) Generative grammatical studies in the Japanese language. Ph.D. dissertation. MIT.

Martin, Samuel E. (1988) *A reference grammar of Japanese*. New Haven: Yale University Press.

宮川繁 (1989)「使役形と語彙部門」久野暲・柴谷方良(編)『日本語学の新展開』: 187-211. 東京: くろしお出版.

森山卓郎 (1995)「並列述語構文考」仁田義雄（編）『複文の研究（上）』: 127-149. 東京: くろしお出版.

Radford, Andrew (1981) *Transformational Syntax*. New York: Cambridge University Press.

Shibatani, Masayoshi (1973) Semantics of Japanese causativization. *Foundations of Language* 7: 327-373.

---

c. *太郎が次郎に息子に食器を洗い, 娘にテーブルを拭かせた

d. *太郎が次郎に息子に食器を洗い, テーブルを拭かせた

なぜニ使役文のタイプによってこのような違いが出てくるのか。これについても、あわせて考えていきたい。

柴谷方良 (1978)『日本語の分析』東京: 大修館書店.
寺村秀夫 (1984)「並列的接続とその影の統括命題」『日本語学』3-8: 67-74.
寺村秀夫 (1991)『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』東京: くろしお出版.
渡辺実 (1971)『国語構文論』東京: 塙書房.

Coordination and *Ni*-Causative Constructions in Japanese

IKI Masaru
(Graduate School of Humanities, Kyushu University)

This paper concerns the so-called *ni*-causative construction in Japanese, in which the Causee argument is marked by the case particle -*ni*. I propose that the causative morpheme *sase* in this construction has the following properties.

(i) *Sase* is an independent lexical item in a Numeration. (I.e., Verb+ s*ase* is not yet a single element at the stage of Numeration.)

(ii) *Sase* cliticizes to the adjacent verbal stem in the PF component.

I point out that neither of the Causer and the Causee argument can be included in the conjoined part α in (iii), and show that the observation can be accounted for by assuming (iv) and (v) in addition to (i) and (ii).

(iii) ... [$_{\alpha}$[... V], [... V]]-sase-Tense.

(iv) *Sase* assigns the case marker -*ga* to one and only one Causer argument.

(v) *Sase* assigns the case marker -*ni* to one and only one Causee argument.

This paper in effect argues against the analyses in which it is assumed that *sase* is attached to a verbal stem in the Lexicon, (e.g., Miyagawa 1989), and the analyses in which *sase* is not considered as an independent element but a reflection of a certain feature (cf. Halle and Marantz 1993).

（初稿受理日 2009 年 2 月 28 日　最終稿受理日 2009 年 10 月 17 日）